

重くのしかかってくる。

爆撃、停電、海底二千米の端島礦、

水没の梯子をよじ登る

北海道 中嶋 栄 吉

今日も毎日の様に一番方に入坑した。海底二千メートルの立坑を何分かって坑底に着いた。そこから現場迄尙約二十分ほどの坑道を歩いて現場に着いた。それからいつものような仕事をしていた午前十時半を過ぎた頃突然ビックリが止まった。

昇坑にいて仕事をしていた自分らがビックリして下の坑道に下りて来たときには付近から電気が止まった大変だ空気が送られてこなくなるし、海底の水を汲みあげるポンプが止まるようなことになれば大変だだちに立て坑下に行こうと行って係員が先になり五人また十人と次々あつち、こつちから集まって立坑下に来たときには先に来た人達を立坑側にある鉄梯子を登って行く人々を

順を待ちながら見守っていた。

坑道はひざ近くまで水がたまって来ている。係員の説明が初めてあった、高島坑の発電所が爆撃され、高島坑も端島坑も完全に電気のない廃坑となってしまったので、我々は生きるためにこの梯子を登って外に出るしかない、皆落着いて体には何もたず皆が昇って行く鉄梯子を身一つで一步一步昇って生きることと、言い聞かされた。

上を見あげれば遠々点々と灯が並び、「よいしょ」「よいしょ」と皆が声をそろえて誰ともなく腹の底から出る生きるための梯子昇りが始まった、三、四メートル毎に一囲りする短い梯子を約二千メートルの海の底からすき腹も忘れて約一時間半かかって全身汗びっしょびしょになってやっと外のあかりが見えて来たときは、我ながらよくぞ昇って来たとうれしくなり、妻子の顔が始めて思い浮かぶ気持ちが出て来ました。

元氣を出して最後の出口に昇り付いたとき、外回りに大勢の人々がいて最後の手を差し出したとき誰か知らんが暖かい手がしっかりと私の手をつかんで「御苦労さ

ん」というて引っ張りあげるように外に出して下さいました。其のときはうれしさと、つかれ、とでしばらくは係の人達に抱きかかえられ風呂場へ連れて行かれました。

体を洗いながら聞いたことは高島坑の発電所が爆撃されたので当坑も電気がこないで、今後はこの非常時のため発電所の復活が出来るか否かは不明であろうのとこのらしい、ときに昭和二十年七月二十五日ほんとうに良い青空の好日よりでした。

其の後は毎日仕事もなく出来ず遠く樺太に残して来て、其の妻のことや思い浮べ手紙を書くのが楽しみのものでした。数日が過ぎ八月六日広島に新型爆弾が落とされ、広島市が全滅したとの新聞を見ました。寮にいる皆で仕事も出来ず妻子の元へ送金のこともどうなることかと皆と相談して、会社へ相談に代表を送り出そうと話しながら、今八月九日私の当番で十一時に水のタンクの所へ「ヤカン」をもって水をくみに出かけました。

ときにかんかんでりの暑い日でしたタンクに近付くと、数人が並んでいるので、後について番のくるのを

待っておりましたとき、突然右の「ホホ」が暑くなり目がくらむ様な強い光りに皆が「アッ」と声をあげたのと同時に「ドドドドド」という音が耳を「つんざき」ものすごい地上が「ユレ」るような気がして「一同」一同となつて夢中で直ぐ近くの八階建てのビル係員住宅でしたが、地下に「タイヒ」場があることが知らされていたので、土足のまま、座敷を走り過ぎて反対がわの入口にある「ヒナン所」の入口から地下へと、にげ込みました。そして一同二十人あまりがこの一室で二十分あまりじっとしていたとき皆が顔を見合わせ言葉もなく。

突然一人が何の音もしないちよつと外を見てくると言いながら出て行きましたが、二、三分で戻って来て外はなんでもなししかし屋上の見張の人の大声が聞こえた「長崎の方がまるで火の海だ、赤い炎と煙で外は何も見えない」とどなっていた。さあ出ようと一同安心やら不安やらで寮に戻り、屋上に昇って皆で長崎の方を見ると一面火と煙で何かも見えない、後日知ったのですがこれが「ゲンシバクダン」であったことを知りました。

其の後何日も何もせずただ毎日屋上から長崎の方を見

ておりましたが、四、五日してやうやう煙もなくなったなあと話会っている内に「あの一八月十五日の終戦の詔勅をラジオで聞くことになりました。

坑内は「水ぼつ」仕事は出来ず半月位の間は今度は終戦、其の内に「ソ連」も参戦して樺太は「ソ連」の支配下になり我々の家族は外地という地に本国に帰る日を夢見て過ごしていることだろう。

「私の家族は妻と子供三人」私は八月二十日に会社に御願いして退職の手続きをし、北海道へ来て其の日から外地に残留している家族の引揚の運動をなすべく友人知人を尋ね歩き、数年後の引揚者の函館迎え入れに、家族の対面に尽力して来ました。

御蔭様で私の家族も二十八年引揚げて参り、当地赤平炭鉱で戦後の無一文から立ちあがり、五人の子供も全員一人前に成人致し、妻と幸せな日を過ごしております。夫婦共に「身体障害者」ですが不自由ながら満足しています有難う御座います。

北樺太の抑留に耐えて

北海道 中谷 豊

第二次大戦末期、私は戦争の渦中に巻き込まれ、終戦捕虜の体験を思い起こす。

昭和二十年八月七日ソ連軍の参戦、国境突破の情報を受け、守備隊救援のため北上する。

樺太の国境近く、気屯に到着、砲声が聞こえる。戦闘するも、ソ連軍の戦車を先頭の進攻で、内路村まで撤退する。

牛馬の屍、累々と横たわり臭気が漂う。

路上は恵須取町方面より避難する住民で一杯だ。赤児を背に幼子の手を取り、ある者は泣く元氣も無く。路上にうづくまりぼうぜん自失だ。頭髮衣類は泥だらけの逃避、戦争の悲惨が目には焼き付く。

どうしようもないいだち、日本敗戦の末路を見た。

ソ連戦車のくる前に早く逃げてくれと、避難民の無事を